■ 分科会委員から出された意見

（教育 NPO Seven Swell との連携事業に関する意見）

・新しいものを開発するということは、子どもは好きだと思う。また、それが一般の方のところに届けば、それは素晴らしいことであると思う。新しい風を入れていただき、それをコツコツと広げていってもらえれば良いと思う。
・こういった事業は完成するまでの過程での学び、問題解決のために考えて行動することが大切であると思う。繰り返し課題に挑み、失敗を経験しながらも最終的に目的を達成して喜びを感じること、また相手が喜んでくれることで感じる喜び、それは何事にも代えがたいことであると思う。中学校でもこのような事業を行いたいが、なかなか減少傾向にあるという現状がある。
・たくさんの人と関わる機会を設けているところが素晴らしいと思う。目的がしっかりあって、それをどうするか、何を作るかというクリエイティブな話し合いができること、そこに子どもたちが意見を出しながら関わっていくこと、コミュニケーションが苦手な生徒も多いと思うが、それをスキルアップしていくために目的がはっきりとしたこのような事業がうまく機能していて素晴らしいと思う。是非発展させていってほしい。
・「働く」ということは必ず対象者がいて、その対象者の困りごとを解決する、対象者を幸せにすることが目的であると思う。中学生や高校生はなかなか職業にしか目がいかないが、そこから一歩踏み込んでお客さまと接する、誰かのためになるということを考える経験をすることがこのような地域連携・企業連携の意義であると思う。活動して良かった、という感想で終わるのではなく、課題解決のために今後どうしていくのかを考えるきっかけになっていけば良いと思う。学校の中だけではなかなか難しい事業も外部と連携するとできると思うので、しっかりと連携を組んで高等専修学校生の成長に貢献できれば良いと思う。

４．高等専修学校の認知度に関するアンケート

地域の中学校の教員が、どの程度高等専修学校について認知しているか、また高等専修学校での教育に関してどのようなことを求めているかを把握するために「高等専修学校の認知度に関するアンケート」を実施した。アンケートの結果をもとに、地域振興分科会において意見交換を行った。下記にアンケートの概要を示す。

４－１．アンケート概要

（実施時期）　令和５年 10 月 20 日～11 月 20 日
（対象）　愛知県岡崎市、安城市、刈谷市の中学校の常勤教員
（調査方法）　調査用紙の配布による
（回答数）　８３名
（アンケート用紙）　次頁に掲載

■　高等専修学校の認知度に関するアンケート（文科省委託事業に伴う調査）■

学校法人さくら学園

安城生活福祉高等専修学校

日頃より本校の教育活動にご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

当アンケートは「高等専修学校」の認知度を調査するものです。ご回答頂きました内容を、今後の高等専修学校の運営の参考にさせて頂きたいと思います。お忙しいところ恐縮ですが、ご協力の程よろしくお願いいたします。

（ 中学校名：＿＿＿＿＿中学校 、 回答者役職名：＿＿＿＿＿ 、 回答者教員歴：＿＿年 ）

＜各質問に関しまして、該当する番号に〇をつけてください。＞

設問１： 高等専修学校」という学校種をご存知ですか。

（ ① 大変よく知っている　② 知っている　③ あまり知らない　④ 全く知らない ）

設問２：中学校卒業後の進学先の１つとして、生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがありますか。

（ ① 多くある　② 少しある　③ ない　④ 生徒に進路指導を行った経験が無い ）

設問３： 高等専修学校」は、中学校時代に不登校の生徒、発達障がいのある生徒、一人親家庭の生徒、住民税非課税世帯の生徒などの割合が高く、多種多様な生徒が通学していることをご存知ですか。

（ ① 大変よく知っている　② 知っている　③ あまり知らない　④ 全く知らない ）

設問４： 高等専修学校」では、高等学校と同様に保護者の年収等に応じて経済的支援制度（就学支援金、授業料軽減など）が受けられることをご存知ですか。

（ ① 大変よく知っている　② 知っている　③ あまり知らない　④ 全く知らない ）

設問５： 高等専修学校」の教育内容や教育方法に対して、強く求める項目は下記の中でどれですか（３つまで）。

（ ① 専門的な授業の充実　② 現場実習の充実　③ 様々な資格の取得　④ １人１人へのきめ細かい授業対応
⑤ 一般教科の基礎的内容の習得　⑥ 普通高校では経験しないような事業への参画(企業・地域連携)　⑦ 就職を見据えた指導

設問６： 高等専修学校」から大学や短大等の受験ができることをご存知ですか。

（ ① 大変よく知っている　② 知っている　③ あまり知らない　④ 全く知らない ）

設問７： 高等専修学校」では、企業連携や地域連携など社会と接点をもった様々な事業を行っていることをご存知ですか（本校の例：アンフォーレでのファッションショー、外部イベントでの手作りお菓子の販売など）。

（ ① 大変よく知っている　② 知っている　③ あまり知らない　④ 全く知らない ）

その他：　「高等専修学校」に対するイメージ、期待すること、改善してほしいことなどがございましたら、ご自由に記述願います。

（　　）

回答は以上です。ご協力ありがとうございました。ご回答いただきましたアンケート用紙は下記まで FAX 頂けました幸いです。よろしくお願いいたします。　FAX：0566－74－0862　（担当：宮治）

４－２．アンケート結果

高等専修学校の認知度に関するアンケートに関して、各設問の回答を、「① 教員経験 11 年以上の先生」、「② 教員経験 10 年以下の先生」、「③ 全教員（①+②）」に分けて集計した結果を示す。ただし、設問５の「高等専修学校の教育内容や教育方法に強く求めること」に関する問いのみ教員経験に分けて集計することはせず、全教員のみを結果を示した。

① 設問１：「高等専修学校」という学校種をご存知ですか。

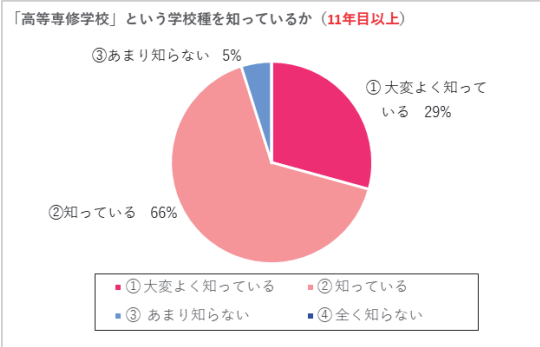


Fig.4-1 「高等専修学校」という学校種を知っているか（教員経験 11 年以上の先生）

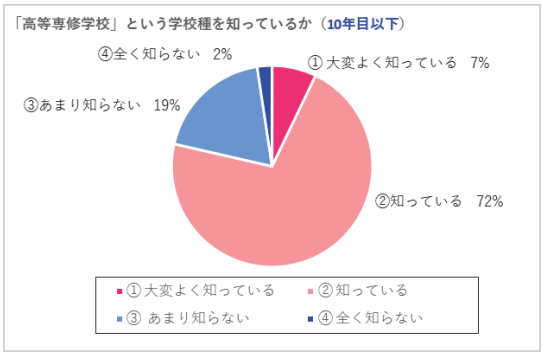


Fig.4-2「高等専修学校」という学校種を知っているか（教員経験 10 年以下の先生）

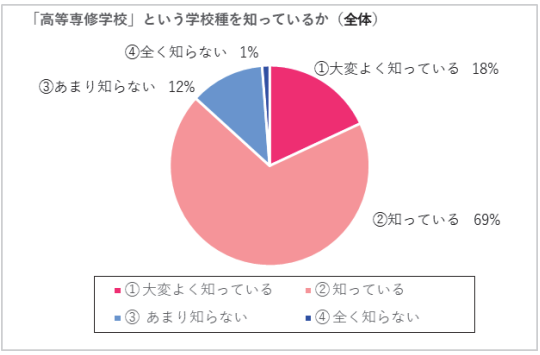


Fig.4-3「高等専修学校」という学校種を知っているか（全ての先生）

「高等専修学校」という学校種を知っているか

No.	回答者	①大変よく知っている	②知っている	③ あまり知らない	④全く知らない
1	経験年数11年以上の教員（41名）	12	27	2	0
2	経験年数10年以下の教員（42名）	3	30	8	1
3	全ての教員（83名）	15	57	10	1

Table 4-1 「高等専修学校」という学校種を知っているか

（まとめ）

「高等専修学校という学校種を知っているか」という問いに関して、「大変よく知っている」もしくは「知っている」と回答した教員の割合は、教員経験 11 年以上では 95%、教員経験が 10 年以下では 79%となった。

「全く知らない」と回答した教員はほとんどおらず、特に教員経験の長い先生の中でしっかりと認知されていることが分かった。今後は特に経験年数の短い先生に対して、積極的に高等専修学校がどのような学校であるかを発信し、認知を広めていく必要があると言える。

② 設問２：中学校卒業後の進学先の 1 つとして、生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがありますか。

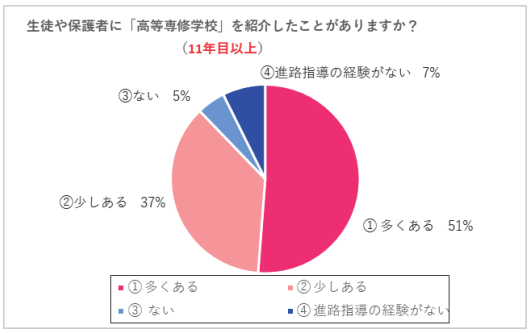


Fig.4-4 生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがあるか（教員経験 11 年以上の先生）

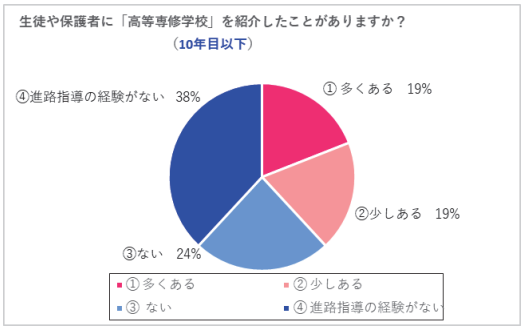


Fig.4-5 生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがあるか（教員経験 10 年以下の先生）

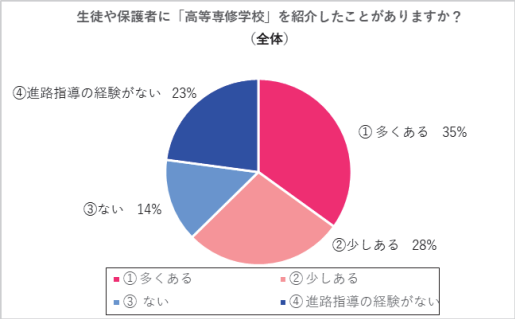


Fig.4-6 生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがあるか（全ての先生）

生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがあるか

No.	回答者	①多くある	②少しある	③ ない	④進路指導の経験がない
1	経験年数11年以上の教員（41名）	21	15	2	3
2	経験年数10年以下の教員（42名）	8	8	10	16
3	全ての教員（83名）	29	23	12	19

Table 4-2 生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがあるか

（まとめ）

中学校卒業後の進学先の１つとして、生徒や保護者に「高等専修学校」を紹介したことがあるかという問いに対しては、「多くある」もしくは「少しある」と回答した教員の割合は、教員経験 11 年以上では 95%、教員経験が 10 年以下では 52%となった（進路指導経験のある教員のみをカウントした）。教員経験の長い先生においては、ほとんどの先生が高等専修学校を認知して進路指導において生徒に紹介しているが、教員経験の短い先生においては、認知はしているが進路として紹介するに至っていないケースが多いということが分かった。高等専修学校が地域でどのように機能しているかを若い先生方に認知してもらい、高等専修学校に進学して夢を叶えることができるような生徒が増えるように働きかけを行っていく必要があると考える。

③ 設問３：「高等専修学校」は、中学校時代に不登校の生徒、発達障がいのある生徒、一人親家庭の生徒、住民税非課税世帯の生徒などの割合が高く、多種多様な生徒が通学していることをご存知ですか。

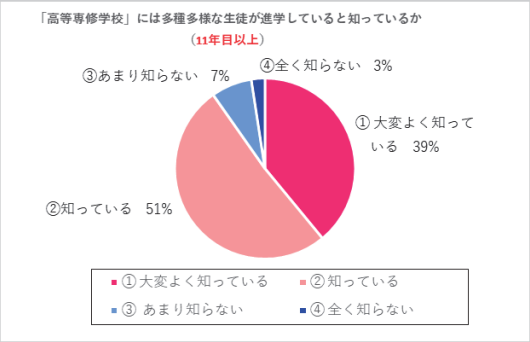


Fig.4-7「高等専修学校」には多種多様な生徒が進学していると知っているか（教員経験 11 年以上の先生）

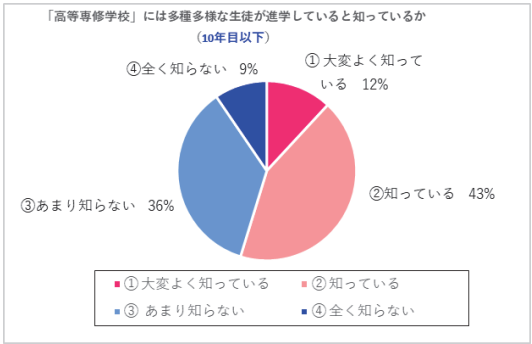


Fig.4-8「高等専修学校」には多種多様な生徒が進学していると知っているか（教員経験 10 年以下の先生）

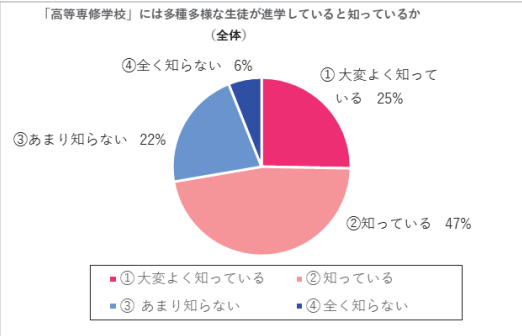


Fig.4-9「高等専修学校」には多種多様な生徒が進学していると知っているか（全ての先生）

「高等専修学校」には多種多様な生徒が進学していると知っているか

No.	回答者	①大変よく知っている	②知っている	③ あまり知らない	④全く知らない
1	経験年数11年以上の教員（41名）	16	21	3	1
2	経験年数10年以下の教員（42名）	5	18	15	4
3	全ての教員（83名）	21	39	18	5

Table 4-3「高等専修学校」には多種多様な生徒が進学していると知っているか

（まとめ）

「高等専修学校」は、中学校時代に不登校の生徒、発達障がいのある生徒、一人親家庭の生徒、住民税非課税世帯の生徒などの割合が高く、多種多様な生徒が通学していることを知っているかという問いに関して、「大変よく知っている」もしくは「知っている」と回答した教員の割合は、教員経験 11 年以上では 90%、教員経験が 10 年以下では 55%となった。

各地域の高等専修学校では、多種多様な生徒を受け入れ、学びのセーフティネットとして機能している面が強いが、教員経験が短い先生においてはあまり認知されていないということがアンケートによって分かった。これを改善して認知を広げていくことが今後重要であると考える。

④　設問 4：「高等専修学校」では、高等学校と同様に保護者の年収等に応じて経済的支援制度（就学支援金、授業料軽減など）が受けられることをご存知ですか。

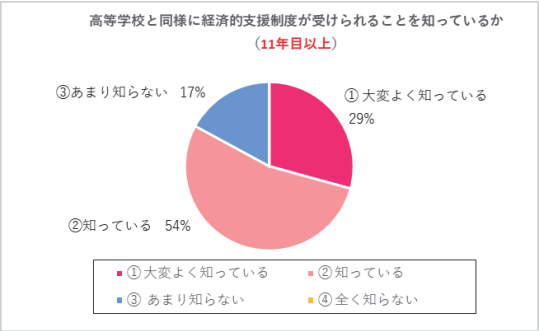


Fig.4-10 高等学校と同様に経済的支援制度が受けられることを知っているか（教員経験 11 年以上の先生）

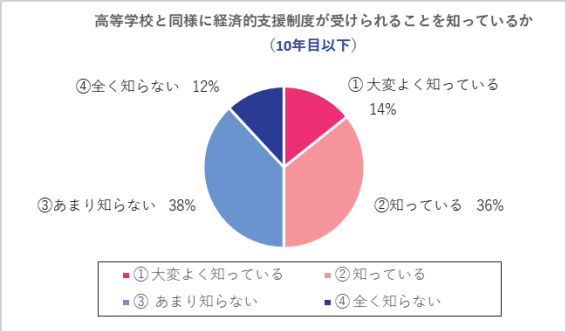


Fig.4-11 高等学校と同様に経済的支援制度が受けられることを知っているか（教員経験 10 年以下の先生）

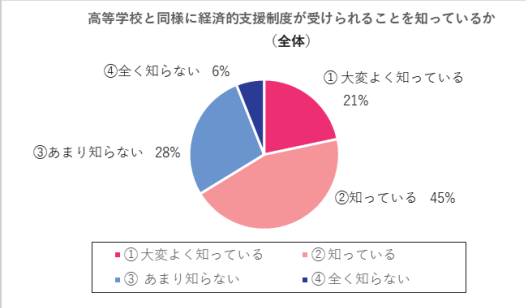


Fig.4-12 高等学校と同様に経済的支援制度が受けられることを知っているか（全ての先生）

高等学校と同様に経済的支援制度が受けられることを知っているか

No.	回答者	①大変よく知っている	②知っている	③ あまり知らない	④全く知らない
1	経験年数11年以上の教員（41名）	12	22	7	0
2	経験年数10年以下の教員（42名）	6	15	16	5
3	全ての教員（83名）	18	37	23	5

Table 4 高等学校と同様に経済的支援制度が受けられることを知っているか

（まとめ）

「高等専修学校」では、高等学校と同様に保護者の年収等に応じて経済的支援制度（就学支援金、授業料軽減など）が受けられることを知っているかという問いに関して、「大変よく知っている」もしくは「知っている」と回答した教員の割合は、教員経験 11 年以上では 83%、教員経験が 10 年以下では 50%となった。高等専修学校に在籍する生徒は経済的に困窮している家庭の割合が高いが、特に教員経験の短い先生において、経済的支援制度が受けられるということに対する認知度は低いことが分かった。

⑤　設問５：「高等専修学校」の教育内容や教育方法に対して、強く求める項目は何ですか。

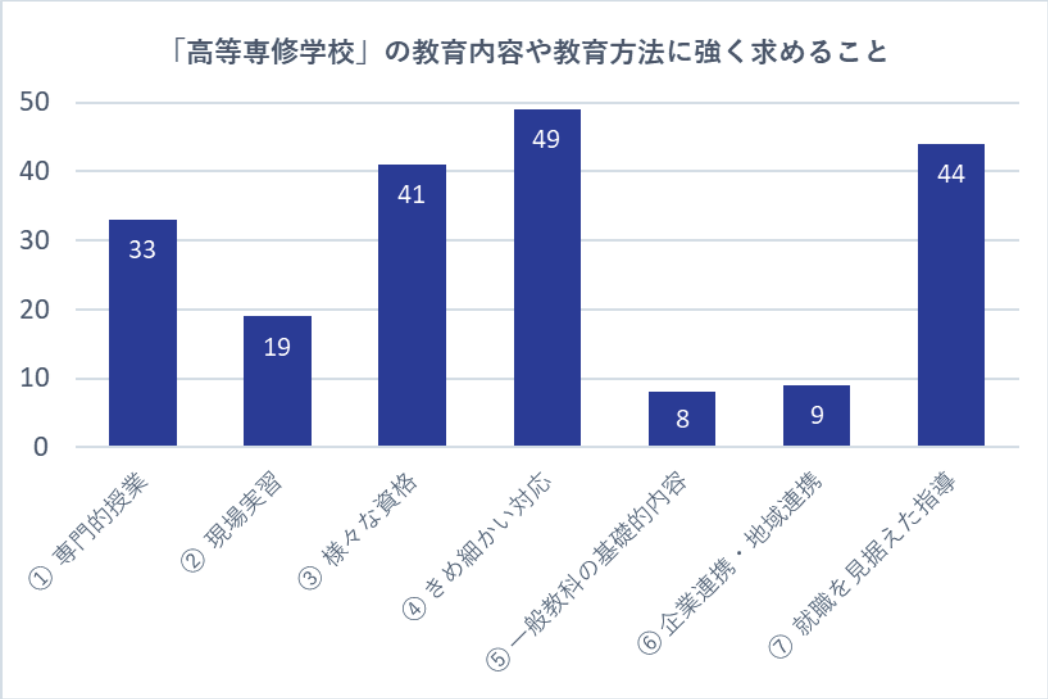


Fig.4-13 「高等専修学校」の教育内容や教育方法に強く求めること（1 人３つまで回答）
（全ての先生）

選択項目	① 専門的授業	② 現場実習	③ 様々な資格	④きめ細かい対応	⑤一般教科の基礎的内容	⑥企業連携・地域連携	⑦ 就職を見据えた指導
人数	33	19	41	49	8	9	44

Table５ 「高等専修学校」の教育内容や教育方法に強く求めること（1 人３つまで回答）

（まとめ）

「高等専修学校」の教育内容や教育方法に対して、強く求める項目は何かという問いに関して、１番多くの先生が挙げたのは、「きめ細かい対応」であり、続いて、「就職を見据えた指導」、「様々な資格」となった。逆にもっとも票が集まらなかったのは、「一般教科の基礎的内容」であった。多種多様な生徒に対して、手に職をつけるような専門的な内容の学習を行い、就職に繋げること強く期待されているということが分かった。

⑥　設問６：「高等専修学校」から大学や短大等の受験ができることをご存知ですか。

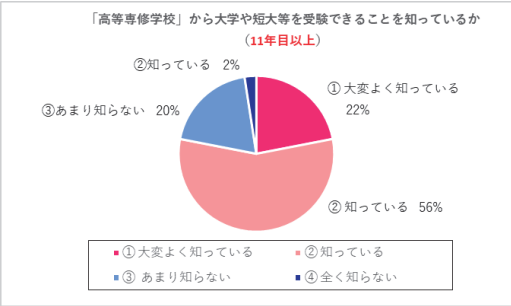


Fig.4-14「高等専修学校」から大学や短大等を受験できることを知っているか（教員経験 11 年以上の先生）

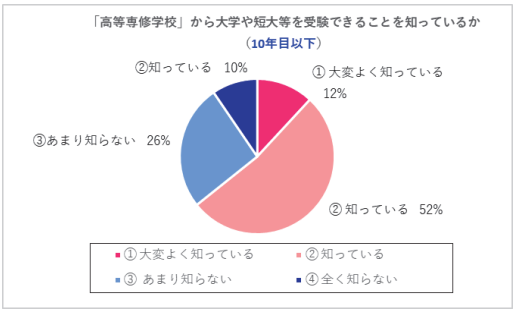


Fig.4-15「高等専修学校」から大学や短大等を受験できることを知っているか（教員経験 10 年以下の先生）

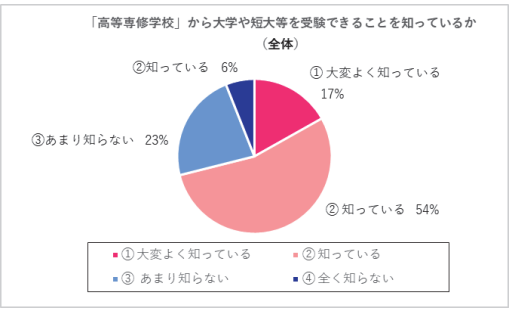


Fig.4-16「高等専修学校」から大学や短大等を受験できることを知っているか（全ての先生）

「高等専修学校」から大学や短大等を受験できることを知っているか

No.	回答者	①大変よく知っている	②知っている	③ あまり知らない	④全く知らない
1	経験年数11年以上の教員（41名）	9	23	8	1
2	経験年数10年以下の教員（42名）	5	22	11	4
3	全ての教員（83名）	14	45	19	5

Table６「高等専修学校」から大学や短大等を受験できることを知っているか

（まとめ）

「高等専修学校」から大学や短大等の受験ができることを知っているかという問いに関しては、「大変よく知っている」もしくは「知っている」と回答した教員の割合は、教員経験 11 年以上では 78%、教員経験が 10 年以下では 64%となった。

教員経験が短い先生においても、他の問いと比較すると認知度が高いことが分かった。本校や周辺地域の高等専修学校が通信制高校と技能連携を行っていることも一因かと考える。

⑦　設問７：「高等専修学校」では、企業連携や地域連携など社会と接点をもった様々な事業を行っていることをご存知ですか

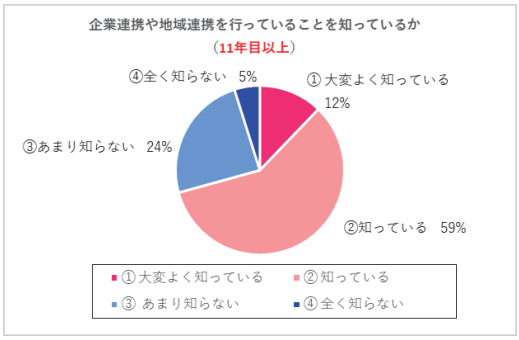


Fig.4-17 企業連携や地域連携を行っていることを知っているか（教員経験 11 年以上の先生）

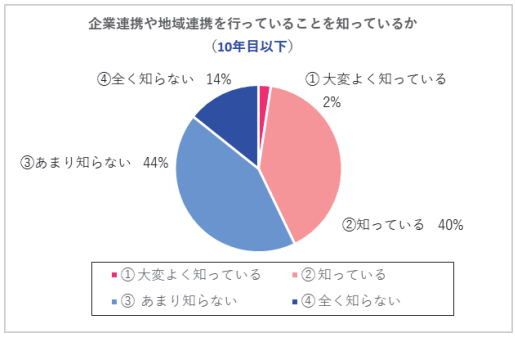


Fig.4-18 企業連携や地域連携を行っていることを知っているか （教員経験 10 年以下の先生）

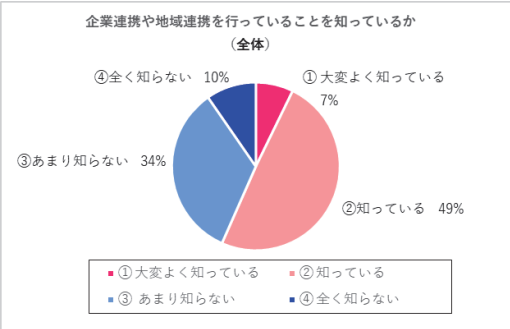


Fig.4-19 企業連携や地域連携を行っていることを知っているか（全ての先生）

企業連携や地域連携を行っていることを知っているか

No.	回答者	①大変よく知っている	②知っている	③ あまり知らない	④全く知らない
1	経験年数11年以上の教員（41名）	5	24	10	2
2	経験年数10年以下の教員（42名）	1	17	18	6
3	全ての教員（83名）	6	41	28	8

Table 7 企業連携や地域連携を行っていることを知っているか

（まとめ）

「高等専修学校」では、企業連携や地域連携など社会と接点をもった様々な事業を行っていることを知っているかという問いに関して、「大変よく知っている」もしくは「知っている」と回答した教員の割合は、教員経験11 年以上では 71%、教員経験が 10 年以下では 42%となった。本校では、生徒の興味を引き出すために重要な事業と位置づけて積極的に地域連携事業、企業連携事業を実施しているが、その認知度は特に教員経験が短い先生にとって、とても低いということがわかった。今後はもっと積極的に広報を行っていく必要がある。

⑧ その他：「高等専修学校」に対するイメージ、期待すること、改善してほしいことなどがございましたら、ご自由に記述願います。

（回答された事項）

- 社会に適応しづらい生徒が年々増えているが、こうした生徒の受け皿になっていることに感謝している。
- 進学した生徒が生き生きした表情で母校を訪問する姿を見て、高等専修学校の先生方の丁寧な指導の様子が伝わる。
- いろいろな種類の「科」を増やしてほしい。
- 「専修」という名称が保護者のハードルを上げているように思う（かなり改善されてはいるが）。「高等学校と同じ」というイメージが広がると良いと思う。
- 中学３年生の担任をするたびにお世話になっている。手厚い支援、サポートを頂き大変感謝している。
- 授業料が高いイメージがある。
- 子どもや親の不安を長期的に見て、支えて頂ける施設であると認識している。
- いつま幅広い生徒たちを温かく成長させてくださり、感謝している。
- 生徒が立ち直るきっかけをいただいていることに感謝の気持ちでいっぱいである。
- 不登校、学力不振の生徒への温かい対応に感謝している。
- ３年間で全額いくらかかるかが分かると保護者に説明ができ、今よりも生徒を勧めやすくなると思う。
- １人１人に合った学習内容を保障してほしい。
- 将来生徒の力になるよう技術や知識、経験を得られることを期待している。
- 「学生」としての楽しみや社会へ出てから役立つ内容を盛り込んだ勉強を期待している。
- 専門的に学びたい生徒への対応、就学に困っている生徒の支援に力を入れている学校だと思う。
- 卒業した生徒がたまに中学校に来てくれることがあり、楽しそうに高等専修学校での生活について話してくれることがあり嬉しい。
- 不登校だった生徒の楽しく通うことができる学校だと思う。

３－６　徳島県（担当校：龍昇経理情報専門学校）

文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
高等専修学校の学びの「セーフティーネット」
令和５年度　地域連携委員会（徳島地区）実施報告

開催校　龍昇学園 龍昇経理情報専門学校

高等専修学校における　『学びのセーフティーネット』機能の現状と課題
～　生徒の成長を目指す連続性と一貫性の教育の有機的つながり　～

目　　次

１　はじめに
２　スクールカウンセラーと鳴門教育大学との連携（第１回会議）
（１）スクールカウンセラーの効果
（２）心理実践実習生（大学院生）受け入れの成果
３　生徒の成長を目指す連続性と一貫性の教育の有機的つながり（第２回会議）
（１）生徒の成長の発信　～成長を願った取組～
（２）出前授業にチャレンジ　「小学校への電卓出前授業」
（３）エール　＋＋α
（４）意見交換　＜生徒・保護者に高等専修学校を広く知ってもらうために＞

【開催した会の一覧】

回	期　日　・　内　容
第１回	令和５年１１月２１日（火）14：30～16：30　本校 ⑴スクールカウンセラーの効果 ⑵鳴門教育大学との連携と理実践実習生（大学院生）受け入れの効果
第２回	令和５年１２月25日（月）13：30～15：30　本校 ⑴生徒の成長の発信　～成長を願った取組～ 出前授業・ｅスポーツ・フラワー会・これが龍昇のデザインカ （２）出前授業にチャレンジ 出前授業の効果と課題 （３）エール　＋＋α 大学が求める学生像，卒業生からのメッセージ （４）意見 生徒・保護者に高等専修学校を広く知ってもらうために

【委　　員】

	氏　名	所　属　・　職　名	備　考
第１回	吉井　　健治	鳴門教育大学	
	多田　　芙美	スクールカウンセラー	
	前田　　愛実	鳴門教育大学心理実践実習生	
	久次米　健一	龍昇経理情報専門学校校長	
	横山　鉄也	龍昇経理情報専門学校名誉校長	
	久次米　健義	龍昇経理情報専門学校副校長	
第２回	松本　賢治	徳島市教育委員会教育長	
	林　　日出夫	四国大学産学連携推進室主幹	
	小川　善弘	徳島中学校校長	
	松尾　真千子	富田中学校校長	
	仁木　茂雄	加茂名小学校教頭	
	久米　輝	南部中学校主幹教諭	
	豊田　勝	城西中学校教諭	
	若山　輝紀	城東中学校教諭	
	林　　拓磨	加茂名中学校教諭	
	久次米　健一	龍昇経理情報専門学校校長	
	横山　鉄也	龍昇経理情報専門学校名誉校長	
	久次米　健義	龍昇経理情報専門学校副校長	
	一宮　茜	龍昇経理情報専門学校教諭	

１　はじめに

不登校や多様な個性のある生徒の増加は徳島県でも例外でない。中学校の生徒たちが「学びのセーフティーネット」の役割も果たしている高等専修学校を知ることは進路の選択肢が広がるだけでなく，入学した生徒たちは様々な取り組みにより，新しい自分の発見，自己を肯定する力の獲得等に加え，社会人となるための学び直しにもつながっている。

昨年度８月に県内の公立中学校の先生方にご協力いただいたアンケート結果から高等専修学校の認知度はあるものの，生徒や保護者に対しての知名度が高くないことがわかった。そこで，本校が実践している特色ある教育を通した生徒の成長の発信を第４期教育振興計画に「連続性と一貫性の中で高等専修学校の有機的なつながり」が諮問されていることを考慮しながら，実践や会議等についてまとめたことをたことを発信することにより認知度向上につなげたい。

２　スクールカウンセラーと心理実践実習（第１回会議）

（１）スクールカウンセラーの効果

本校に入学してくる生徒は，まじめで思いやりがあり，資格を取りたい，学び直したい等の目的を持つ一方，コミュニケーションが苦手であったり自己を肯定する力が弱かったりする。学習意欲や能力がありながら登校

しづらい生徒，その指導にあたる教師、保護者を含め教育相談や心のケアの必要性を痛感し，2020 年度にスクールカウンセラー設置に関しての助言を鳴門教育大学教授吉井健治先生にいただきながら，本校にスクールカウンセラー（以下「ＳＣ」という。）として３年間関わっていただき，2021 年度からは多田芙美先生にもＳＣとしてカウンセリングをしていただいている。

カウンセリング時間は１回５０分，月２回であるが，今年度の利用状況は毎回予約で埋まっており，中学校時代に相談を経験している生徒や保護者もいれば，初めてカウンセリングを受ける生徒もいる。生徒にとっては教師や保護者（家族）以外の大人に話を聞いてもらうことができ，教師にとってはカウンセリング後の簡単なミーティングにより生徒理解が深まり，日常の指導に生かすことができる。

（２）鳴門教育大学との連携と心理実践実習生（大学院生）受け入れの成果

吉井先生が本校のＳＣになり心理実践実習生（以下「実習生」という。）の配置についても配慮していただいている。教育大学に学ぶ実習生は，教育に関心が高いのではないかという期待感に加え，本校が信用されたという「連携する意味」を再認識する機会ともなった。実習生の受け入れにあたり，吉井先生と実習コーディネーターの方が本校の生徒実態を予め知っていることが安心感につながった。指導教官は学校担当者と過去に連携をした実績があり，信頼関係があることも大きかった。指導教官等から実習に関する説明，実習生の事前・事後指導に加え，実習生自身の積極的な取り組みがある。ある生徒は，「私と年が近く話がしやすい。学校に行くのがしんどくても頑張っていこうと思う。話をすると気持ちがすっきりする。」と感想を述べている。

（３）意見

各委員から次のような意見が出された。

〇ＳＣが配置され４年，ＳＣが生徒や保護者に定着してきた。同じ生徒や保護者の相談が繰り返されるケースもあり，予約でいっぱいである。１つの方法として，１枠の時間を３０～４０分にすること等が考えられる。

〇ＳＣが「心の健康教育」として予防的関わりの方法について、1 年を通してカリキュラムに組み込む等，定期的に行ってもいいのではないか。

〇ＳＣの案内は，入学式後に生徒と保護者にＳＣから話をして案内プリントの配布をしている。プリントにプライバシーに注意し，了解を得ながら利用者の声を載せることもよい。

〇実習生は生徒から週１回１時間でも話を聞くことで，少しでもメンタルサポートができたと感じている。

〇実習生は生徒と年齢が近く話しやすいと感じる生徒，ベテランのカウンセラーに相談したい生徒，と聞いて欲しい対象に違いがあった場合も相談しやすいのではないか。

〇人に悩みを打ち明けられるという壁をひとつ越えられる。

〇学校でカウンセリングを受けられることで，すぐに病院で受診できない生徒や不安を抱える保護者へのサポートができる。

〇生徒の悩みを教師が気づきにくい場合，カウンセラーを通して発見できる。

〇教師の悩み等をＳＣと相談しながら心理のサポートができる。

〇実習生は年齢が近く「お姉さん」のような存在で話しやすく，先生や親に言えないことが話せる。

〇相談した生徒は気軽に話ができホッとできる時間が持てる。

３　生徒の成長を目指す連続性と一貫性の教育の有機的つながり（第２回会議）

（１）会の趣旨

これまでの会の内容【２０２０年度「これからの時代に必要とされる力（コミュニケーション，人間関係，自己肯定感，主体性，協力，感謝）」，２０２１年度「進路選択の幅を広げるための広報の在り方（アンケート，

強み，イメージが膨らむ情報の発信，卒業後の進路)」，２０２２年度「学びのセーフティーネット」から「連続性と一貫性の教育の有機的つながり」を考える・高等専修学校アンケートについて】の流れとつながりを重視し，今年度は「学びのセーフティーネット機能の現状と課題」について，徳島市教育委員会松本教育長をはじめ，四国大学から林産学連携推進室主幹，中学校から小川校長，松尾校長，３学年主任，進路指導主事等９名の先生方の参加を得てご意見をいただいた。

今年度の会議では，本校の教育を通した生徒の成長を発信することで高等専修学校の認知度向上を図ること，地域に根差した高等専修学校として小学校・中学校・大学との連携を深化させることについて，の２点を主な目的とした。

（２）会議

１　校長あいさつ

２　自己紹介

３　会の概略説明（パワーポイント図３～５）

４　議事

まず、本校から「生徒の成長の発信　～成長を願った取組～」として，出前授業・ｅスポーツ・フラワー会・これが龍昇のデザインカについて説明を行った。「出前授業にチャレンジ」については，出前授業を行った小学校の教頭先生から，学校としての感想や意見を述べていただいた。「エール ＋＋α」では四国大学の先生から建学の精神やチューター制について，中学校の先生から「生徒・保護者に高等専修学校を広く知ってもらうために」について次のようなご意見をいただいた。

（１）生徒の成長の発信～成長を願った取組～

①出前授業…小学校の児童に電卓を「生徒が先生」として教える初めての挑戦で，１１月に地元の２つの小学校で「総合の時間」に電卓を教えた。４名の生徒が参加し，感想として「教える難しさが分かった。緊張した。楽しかった。」等で，帰路の車中ではやり遂げた感があり会話も弾んだ。後日，小学校の児童たちから授業の感想を送っていただいた。

②ｅスポーツ…活動を記録したビデオ（約５分）を見せながら，各場面について説明を加えた。何もないところからスタートし今年で４年目。何をするかを自分たちで決めて活動していくが、トラブルもたくさんある。しかし生徒たちはそこから協力してやり遂げることを学んだ。生徒たちは自分の居場所を見つけたように感じた。

③フラワー会…学校や地域の環境美化に特化した活動だったが，今年度は新たに新聞づくり（フラワー会新聞）にも取り組んだ。

④これが龍昇のデザインカ…フラワー会新聞の裏面に募集したイラストを掲載した。オリジナルの作品で非常に繊細な仕上がりだった。

（２）出前授業にチャレンジ

①礼儀正しい生徒と生徒を見守る先生の姿が印象的だった。龍昇が同じ学区なので親しみを持てたようだ。

②４年生初めての電卓の授業で，指のポジションのことなどに興味や関心を持った。また，授業を学級ごとに行ったのも良かった。

③龍昇の先生が事前説明に来たとき，指導案を書いてきたので，小学校の先生も安心できた。

④龍昇生の電卓のスキルが高いことに驚いた。

⑤練習問題を解いていくとき，簡単な問題からレベルが上がり最後はテストをした。レベルが高い問題もあったが，児童達はやる気が出た。

⑥高校生の説明もよくわかり，分かりにくい児童には同じ目線の高さになり教えていたことが心に残ってい

る。

⑦翌日，児童が担任に「家から電卓を持ってきた良いか」「授業で使って良いか。」「宿題に電卓の問題を出して欲しい。」等の意見が出た。

（３）エール　＋＋α

①建学の精神は全人的自立，それは知識・技術の修得とともに，人間的な成長を志向し，社会に貢献できる実践的な力を確立することだ。具体的には，自立できる人，自ら考え探求する人，人間性豊かな人，社会や地域に貢献できる人を育てること。

②夢を持ち頑張れる，能力を社会で発揮する，資格を活用できる，疑問を解決できる，多様な経験や人との交流で自分を高める人等の入学を望んでいる。

③入試制度も高大連携や自己実現入試等があり，学力だけを問う時代から大きく変わってきている。

④チューター制度を設け学生がキャンパスライフを快適に送るためのサポートをしている。

（４）意見（要約）　＜生徒・保護者に高等専修学校を広く知ってもらうために＞

①社会的認知度を上げることは大切だ。例えば大学受験ができること，高卒以上の求人に応募できること等，学校説明会で各校の進学主任に説明することは大事だ。

②不登校だった生徒が登校できる，自信がなかった生徒が成長する，自信をつけさせることの重要性等を生徒・保護者に知ってもらう，

③ｅスポーツ，ボランティア活動，夜間パトロールをインスタグラムやユーチューブで発信することも方法だ。

④今日見たｅスポーツの動画を教師に見せたい。

⑤学校見学に来たことがきっかけとなり，登校できるようになった事例がある。

⑥不登校だった生徒が龍昇で活躍している事例をもっと知りたい。

⑦新しいことに挑戦し，進化している学校だ。型でなく個に応じた教育をし，目の前の生徒を信じている。教師に待つ姿勢があり，また環境を整えている。

⑧学校説明会で生徒が生き生きしている姿や地域貢献している姿を見てうれしい。

（５）指導助言　まとめ　＜松本教育長から指導助言をいただいた。＞

この会の目的は「高等専修学校の強みをどのように活かしていくか」である。不登校生徒の自立を支えることに加え，生徒一人一人が持っている力を伸ばし，活かすことは大切である。ｅスポーツのビデオでは子どもたちの自然の姿が出ていることや先生方の意見を聞きながら，龍昇学園の取り組みは成功事例のひとつではないかと思う。ビデオに出てくる生徒たちの中学校の元担任の先生が見ると大いに喜ぶのではないだろうか。学校を見学に来る中学生が５０名を超えているようであるが，連絡がある度に受け入れていることに加え，例えば学期に１回教師向けの見学会を開くことも一考でないか。

文部科学省が行っている令和４年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果によると，小中学校における不登校児童生徒数は約 29.9 万人，そのうち約 10 万人が自宅でＩＣＴ等を活用しながら学習をしている。小学校への出前授業を情報発信し，多様な学習のチャンスを増やすことで，電卓に興味関心をもつ児童も現れ他の活動にも良い影響が出ることも考えられる。また，そうしたことがこれからの保護者の希望にもつながってくる。

大学でもチューター制を導入し学生に手厚く関わっている。不登校生徒が高等専修学校で学び様々な取り組みにより登校できるきっかけになれば，大学進学を希望する生徒も現れる。さらなる大学との連携も必要になってくるのではないか。

龍昇高等専修学校を知らない先生方に知ってもらうようさらにアピールし，生徒や保護者が知ることで自分の居場所を見つけることができる生徒もいる。この事業をフルに活用し，龍昇を中心において小・中学校，大学の連携強化を図り，それぞれの立場で必要なことをしていくことが大事と考える。

5　副校長あいさつ

2023年度専修学校における地域産業中核的人材養成事業（文部科学省）
「学びのセーフティーネット機能の充実強化」地域振興分科会（調査研究）

高等専修学校における『学びのセーフティネット』機能の現状と課題

～　生徒の成長を目指す連続性と一貫性の教育の有機的つながり　～

2023年12月25日（月）13時30分～15時30分
龍昇経理情報専門学校

全体進行

1　校長あいさつ

2　自己紹介

3　会の概略説明

4　議事
（1）生徒の成長の発信　～成長を願った取組～
・出前授業　・eスポーツ
・フラワー会　・これが龍昇のデザインカ
（2）出前授業にチャレンジ
・出前授業の効果と課題
（3）エール　＋＋α
・大学が求める学生像
（4）連携における課題
・意見交換
（5）指導助言　まとめ　＜松本教育長＞

5　副校長あいさつ

参加者

松本　賢治	徳島市教育委員会教育長
林　日出夫	四国大学産学連携推進室主幹
小川　善弘	徳島中学校校長
松尾　真千子	富田中学校校長
仁木　茂雄	加茂名小学校教頭
久米　輝	南部中学校主幹教諭
豊田　勝	城西中学校教諭
若山　輝紀	城東中学校教諭
林　拓磨	加茂名中学校教諭
久次米　健一	校長
久次米　健義	副校長
一宮　茜	教諭
横山　鉄也	名誉校長

2023年度専修学校における地域産業中核的人材養成事業（文部科学省）
「学びのセーフティーネット機能の充実強化」地域振興分科会（調査研究）

目　的（全国高等専修学校協会）

1　高等専修学校を取り巻く環境，教育内容，卒業後の進路，各地域での活動実態等を把握する

2　事業を通じて，高等専修学校の社会的認知を高め，それぞれの地域でのさまざまな組織との連携を深める

3　「チーム高等専修学校」として，各校での活動を開示・共有・課題抽出を行い，具体的な改善諸施策を検討

具　体　例

1　高等専修学校の社会的認知の向上

2　高等専修学校の学びのセーフティーネットの確立を目指した不登校改善の実態

3　職業教育を軸としたインクルーシブ教育の実践，卒業後のアフターフォローの充実

4　特色を踏まえたダイバーシティ＆インクル ージョンの視点から多様性を育てる教育の実践事例

徳島県龍昇学園龍昇経理情報専門学校高等課程

高等専修学校における『学びのセーフティネット』機能の現状と課題
～　生徒の成長を目指す連続性と一貫性の教育の有機的つながり　～

今までの流れ

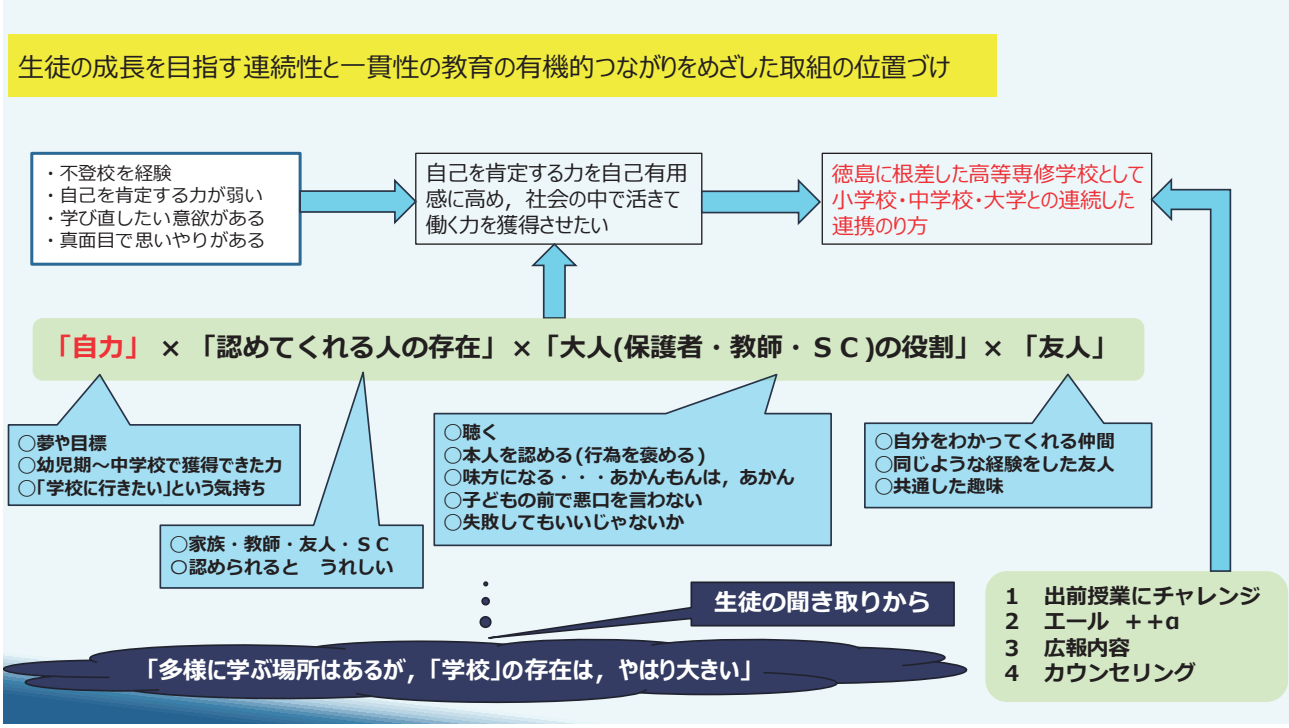
・2020年度　…　これからの時代に必要とされる力（コミュニケーション，人間関係，自己肯定感，主体性，協力，感謝　等）
・2021年度　…　進路選択の幅を広げるため の広報の在り方（アンケート，強み，イメージが膨らむ情報の発信，卒業後の進路　等）
・2022年度　…　「学びのセーフティネット」から「連続性と一貫性の教育の有機的つながり」を考える　高等専修学校アンケート

会の趣旨

不登校や多様な個性のある生徒の増加は徳島県でも例外でなく，その生徒たちが「学びのセーフティネット」の役割を果たす高等専修学校で学ぶことで自立するきっかけを獲得している。中学校卒業後の進路のひとつとして高等専修学校を知ることは選択肢が広がる。また，入学した生徒たちの取組は，新しい自分の発見，自己を肯定する力の獲得等に加え，社会人となるための学び直 にもつながっている。

昨年度8月にご協力いただいたアンケート結果から高等専修学校の認知度が高くないことが指摘された。また，第4期教育振興計画に「連続性と一貫性の中で高等専修学校の有機的なつながり」が諮問されていることから，次の３点について考えを深めたい。

1　生徒の成長の発信　～　成長を願った取組　～　「出前授業にチャレンジ」出前授業の効果と課題
2　エール　＋＋α　～　大学が求める学生像　～
3　生徒・保護者に高等専修学校を広く知ってもらうための内容・働きかけ　異校種間連携における課題
4　カウンセリングにおける効果・課題とこれから（１１月２１日に会を開きました。）



３－７　山口県（担当校：立修館高等専修学校）

文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
学びのセーフティーネット機能の充実強化
令和５年度　地域連携委員会（山口地区）実施報告

開催校　学校法人下関学院　立修館高等専修学校

1　地域振興分科会について

1.1　委員会のテーマ

山口県の中学生および中学校教員の高等専修学校に対する認知度や理解度を高め、高等専修学校における学びのセーフティネット機能の向上を図る。

1.2　全体スケジュール

行程	委員就任依頼	第１回委員会	第２回委員会（報告会）
日時	８月 31 日	９月 28 日（木）	11 月 22 日（水）
内容	依頼状、承諾書、旅費交通費領収書を送付し、９月 15 日〆で返送書類を受理	①３カ年の流れ ②tys で取り上げられた立修館 ③生徒の事例紹介 ④新たな取り組み紹介 ⑤意見交換 ⑥今後の予定	①立修館の現状 ②３年間の活動報告 ③今後の予定

1.3 地域振興分科会委員メンバー

水野久敬	山口県学事文書課　課長
白井雅晃	山口県教育庁教育政策課　課長
磯部芳規	下関市教育委員会　教育長
野口政吾	宇部市教育委員会　教育長
石﨑輝彦	宇部市教育委員会教育支援課（課長同格）
長友義彦	山陽小野田市教育委員会　教育長
田中敬	山口県中学校校長会　会長
川畑誠治	下関市中学校校長会　会長
森田成寿	宇部市中学校校長会　会長
山本時弘	山陽小野田市中学校校長会　会長
藤井房雄	教育支援教室かんせい　生活指導員
関谷豊	立修館高等専修学校　理事長
関谷慶子	立修館高等専修学校　校長
山田靖浩	立修館高等専修学校　教頭
福田佳菜子	立修館高等専修学校　教員
板垣聡美	立修館高等専修学校　教員
奥村翔太	立修館高等専修学校　教員

2 第１回　地域振興分科会　実施報告

2.1 実施概要

実施日時：令和５年９月28日(木)　14:00～15:30

実施場所：立修館高等専修学校

2.2 参加委員

出席者	学校名・役職名
北山博士	山口県総務部学事文書課　※水野久敬の代理
磯部芳規	下関市教育委員会　教育長
石﨑輝彦	宇部市教育委員会教育支援課
佐々木智子	山陽小野田市こころの支援室職員　　※長友義彦の代理
田口眞一	山口県中学校校長会　幹事　　※田中敬の代理
川畑誠治	下関市中学校校長会　会長
森田成寿	宇部市中学校校長会　会長
山本時弘	山陽小野田市中学校校長会　会長
藤井房雄	教育支援教室かんせい　教育相談員
関谷豊	立修館高等専修学校　理事長
関谷慶子	立修館高等専修学校　校長
山田靖浩	立修館高等専修学校　教頭
福田佳菜子	立修館高等専修学校　教員
板垣聡美	立修館高等専修学校　教員
奥村翔太	立修館高等専修学校　教員

2.3【議題１】令和３年度から５年度までの本校の活動状況をパワーポイントで説明し、さらにテレビで本校が放送された時の映像と生徒の事例を紹介する。

2.4【議題２】今年度から行っている取り組みについて写真を用いて説明する。

2.5 委員との意見交換

山口県総務部 学事文書課 北山博士	総務部学事文書課の北山でございます。今日はお招きいただきありがとうございます。本来であれば課長が参る予定だったのですが、今県の方では議会中ということで私が代理で参りました。 立修館さんは前々から様々な活動をされているということで承知しているんですけど、一点お尋ねしたいのは、オープンキャンパスについて、ホームページを見させていただいたところ、7 月 8 日と 8 月 20 日の様子とか、オープンキャンパスのここ数年の変化とか反響とかの感触を教えていただきたいと思います。
関谷豊	ありがとうございます。4 年前までは 5 回入試をしても 45 名に届くかどうかでした。3 年前から、何が理由か分からないのに、専願入試と校長推薦で定員を上回る生徒さんが受験していただくようになりました。私達も正直、なぜこんなに願書が来るのか分からないという話をしていました。2 年前は高等専修はまだ立修館しかなかったのですが、ご存じのように去年、新山口に三部制の大きな新しい学校が出来ていますので、もうこんなに入学生は来ないだろうと思っていたら昨年もたくさん来て、今年もオープンキャンパスで、先ほど言ったように 200 名近い参加がありました。会場に入りきらないものですから、専門学校の校舎の 3 階と 5 階を開けて ICT でつないで、3 会場に分かれてやりました。たくさん来ていただいたんですけど、中には支援学校に行った方がいいんじゃないかという生徒さんもいました。ところが保護者に聞くと、支援学校は採ってくれない、IQ があるから入れないと言われていました。今の子たちもそうなんですが、大学に行く子が増えています。先ほど mix に出ていた子もそうですけど、学力も非常に高くて 10 年前とは全然違ってきているという現状です。20 年前は、どこの高校に行くこともできないような子が来ていたんですが、今はほぼ全員、第一志望で来てくれています。これがどこまで続くか分かりませんが、頑張って行きたいと思います。
下関市教育委員会 磯部芳規	失礼いたします。下関教育委員会といたしましては、登校することを選択していない生徒、不登校生徒と言っていいのか分からない、単純に学校に行くことを選択していない生徒が増えています。もちろん、いじめにあった生徒についてはすごく手を入れて支援していかなければならないのですが、学校に魅力を感じない生徒も含めてそういう生徒さんが増えています。 今日の発表を聞いていまして、やはり魅力あるところに生徒が行くんだなと誠実に感じました。下関教育委員会としても、こういう取り組みを現場に伝えていきたいと思いました。e スポーツもですけど、学校も魅力あるところに生徒が集まる、そういう時代になったと思います。 私事ですが、e スポーツを運営している同級生がおりまして、今度東京で会うので話をしてみようと思います。

	この取り組みを教育委員会のほうでもしっかりしていこうと思っておりますありがとうございました。
宇部市教育委員会 石﨑輝彦	失礼します、宇部市教育委員会の石﨑と申します。今日はどうもありがとうございました。私は小学校の教員なのですごく新鮮な気持ちで拝見しました。 今の宇部市も、不登校の児童生徒の数が右肩上がりです。全国的な傾向かなと感じておりますが、その中で、ゲームとの付き合い方が、親子間で難しいといいますか、やはりeスポーツとして、自分でダラダラとゲームをするのではなくて、何かの目的に向かいながら仲間と支えあいながら高めあっていく目標があればいいのですが、ダラダラ朝までやって起きれなくて、保護者も起こすんだけどなかなか起きれなくて、という子どもたちもたくさんいる中で、改めてeスポーツの可能性を感じたところです。私は教育支援課におりますが、不登校の子どもたちを集めて、体験活動を募集するんです。カヌーとか登山とか彫刻とか。なかなか人が集まらなくて、担当と、eスポーツをやったら子どもたち来るんじゃないか、と言っておりまして、その時はお知恵をお借りして、（板垣先生に）講師で来ていただいたりとか。やはり私達も、時代の流れに沿って子どもたちの現状をしっかり見据えて、不登校対策に取り組んでいくことが大切だなと感じたところです。今日はありがとうございました。
関谷豊	ありがとうございました。子どもたちみんな不登校なんです。不登校だった生徒が不登校の子を指導するので一番影響力あると思います。先ほど言ったように、不登校だった生徒が、ああいう場に行って指導するなんて考えられないですよね、中学校行っていませんから。その子たちが小学生に手取り足取り教えている、それによって自信を付けている。ぜひそういう機会がありましたらお声かけていただければと思います。ありがとうございました。
山陽小野田市教育委員会 佐々木智子	恐れ入ります。私は教育委員会の適応指導教室、不登校の子どもたちが毎日やってくるふれあい相談室というところで支援をさせていただいております。昨年もこの会議に参加させていただきまして、昨年は初めてでございましたので、目が点なことがたくさんございました。今年の4月にこの立修館を卒業した2人が、ちゃんと就職先が決まったとか、新しい進路を見つけたとかで希望に満ち溢れていて、本当に良い高校に行けたと、親子でご挨拶に来てくれた子どもたちがおりました。こうした場所があるということは、私どもが毎日関わっている子どもにとっては大事な居場所なんだなというのは昨年から感じております。私はアナログな人間ですから、昨年はeスポーツの話を聞いて、ゲーム脳になってしまうんじゃないかという、とんでもない質問をしたような気がしましたが、今日よく聞いたら、社会問題ですとか、様々な現代社会の課題を上手に解決するような学習の一つなんだなと、今日はまた一つ学んだ気がいたします。もう一つは、先ほどもございましたが、動物とのふれあいを考えていて、ホースパークとの連携を図りながらホースセラピーということで、地域のいろいろなものを活用しながらやってらっしゃったのかと思いました。eスポーツが好きな子・得意な子、動物が好きな子・得意な子は毛色が違うような気がしますが、先ほどこどもの得意なものを日の当たる場所に持ってきて、自分の思いを仲間と共有するとおっしゃいましたが、本当に私もそう思っております。本年度もこちらにお世話になると存じます。少しでも多くの多くの枠を

	いただきまして、子どもたちが居場所や存在感を持って人生の一歩を歩けるような立修館であってほしいなと願っております。ありがとうございました。
関谷豊	ありがとうございました。今年は希望者の進路達成は100%で、卒業生は進学・就職と決まっております。
山口県中学校校長会 田口眞一	失礼します。貴校の認知度はどんどん上がっておりまして、保護者から名前が出てくるような話が出てきております。中学生や保護者のニーズに合っているのではないかと感じております。それは図らずとも学びのセーフティネットとして強化されてきているんじゃないかなと思って今日の話を伺いました。磯部教育委員長もおっしゃいますが、わくわくする学校をつくれよ、と。そういう学校がここにあるんだなと、大変勉強になりました。地域の資源もうまく活用して、ホースパークを活用して生徒の教育に活かしているのはとても良い取り組みだなと思います。また、こういう学校が下関にあるのも幸せだなと思っております。今後ともよろしくお願いします。ありがとうございました。
下関市中学校 校長会 川畑誠治	失礼します。私は昨年度からこの会議に参加させていただきましたので、内容は十分把握させていただきました。今日すごく興味を持ったのは、昨年度の中学校2年生と中学校の教職員を対象としたアンケートの調査結果に基づいたコメントも含めて、結果の見方を学ばせていただきました。そのアンケートに本校も協力させていただきまして、本校の教職員はこのように思っているのかと、結果から感じ取ることが出来ました。中学校の教員のほうがeスポーツというものに対してどのように意識を変えていくことができるかというのが大きな課題かなと思うので、そういったところを専修学校さんの力をお借りしながら進めていけば、市全体の教員や県内全域に広めていくことができると感じました。これをしっかりと受け止めて帰って、次回の会議に参加させていただきたいと思います。今日はありがとうございました。
関谷豊	ありがとうございました。昔は、市内の中学校に行っても、先生が、立修館は学校じゃないよ、と言って（立修館が）蹴られるという状況でした。文科省にお願いして、大臣報道官と教育振興室長の動画を作ってくれました。あれが全国に流れて、今だいぶ理解が進んでおります。今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。
宇部市中学校 校長会 森田成寿	失礼します。今年度からこの委員ということで参加させていただいております。私は宇部市の教員時代に、進路担当をしているときに2、3度来させていただいたのが記憶にあります。その時の印象と全然違っていてびっくりしているところでございます。一番びっくりしたのが、eスポーツに対する私の認識が間違っていたということを思いました。ゲームだけだという認識だったんですが、今の子どもたちが望まれる力といいますか、仲間と協働してコミュニケーション能力も含めて、課題の解決能力が紹介されましたけど、これは今とても求められるものだなと。なかなか普段の授業ではこういったことが出来ずらい状況で、こういったゲームで積極的にそういった力を付けていけるのであれば、非常に魅力的なことであるのが一つです。それから、近年の子どもは、コロナも影響してかわかりませんが、大きな課題として不登校生徒の増加ですね。とても適切に対応がなされていらっしゃる、御校の取り組みは素晴らしいなと思いますし、不登校は学校を卒業したら引きこもりにつながっていくんで

	すね。これは日本全体としても、こういった子どもが増えることはすごく懸念していますし、将来において税金を支払わない大人になっていきますね。これは日本の国益に大きく関係していくであろうと思いますし、不登校の解消というのは社会全体の大きな課題であると思っております。そういった意味でも、とても意味のある取り組みだと考えております。 学校現場の課題でもあるゲームなんですけど、オンラインゲームが主になっております。保護者としては、子どもが自室にこもってゲームをして、テスト週間は勉強していると思ったら、また部活で疲れて帰ってきたから寝ているなと思ったら、実は布団をかぶって夜中の 1 時までオンライン上で待ち合わせをしてオンラインゲームを始めて、朝方近くまでやっていて、学校に来た時からもうあくびをして、授業中は寝ている。こういったことが多いです。依存症になってる、保護者のかたも困っている。これにどう対応していくかが課題になっているんですけど、この依存症の子どもたちの助け船といいますか、そういった子にも期待できるという望みを持ちまして、またその辺りを今後期待したいと思います。 最後にご質問段ですが、この度文科省（委託事業の）の事業委員ということで、私自身のミッションといいますか、何をしたらいいのかということで、事業評価とか今後あるのかとか、基本的な質問なんですが。
関谷豊	ありがとうございます。依存症については板垣のほうから。まず、委員につきましては、忌憚のないご意見をいただければ、それが議事録という形で文科省のほうに提出することになります。今回は 3 カ年の最後の年なので、今年はこの委員会だけになります。次回は報告会ということで、発表していただく場も今日が最後になります。来年以降はさらなる上の取り組みをしようと思っておりますので、ご協力いただければと思います。それと、引きこもりにつきましては、うちも過去そういう子がおりました。これは、親が引きこもりにさせたくないという強い思いがあれば、その子は 4 年かかりましたけど治って、今は会社で働いております。本当に紙一重ですね。うちはとにかく、家を出してくれと。家を出すためのきっかけが、e スポーツでもいいし馬でもいいし何でもいいと。ヘアメイクでも、とにかくその授業を受けたいと思って家を出てきてくれと、その取っ掛かりが何かできればと思ってやっています。 では依存症のことを板垣から。
板垣聡美	今のゲーム依存のことと、先ほど石﨑先生や川畑先生からありました、ゲーム時間の心配がやはりあるのではなかろうかと思ます。実際、依存気味になっている生徒がいないかと言われれば、e スポーツとゲーム依存は切り離せない関係があるのは事実です。ただ、いわゆる部活動としての e スポーツを考えますと、前提にあるのが、学校に来る、そのためには朝起きなければならないので、その辺はちゃんと考えていると思われる部員がほとんどです。家でもゲームはしているんだろうなとは感じますけど、それが原因で学校で寝ている生徒がいるという問題は今のところ感じていないです。というのも、メンバーがいますので、お互いの声掛け、「お前最近まずいんじゃないの」という声掛けとか、もちろん先生方が気にされる暴力性や暴言は、基本的に禁止にはしているんですけど、自然とそういうのはないです。仲間が周りにいるので、自分のい

	ら立ちを聞いてもらえるんですね。ムカついて物に当たらなくても、話を聞いてもらえる相手がいるので、自然になくなっているのかなと思います。ですので、（ゲーム依存が）ないものではないですし、ゲーム依存とeスポーツの研究は今後も進められていくのではなかろうかと思いますが、明るい部分もあるということをお伝えしたいと思います。
山陽小野田市中学校長会 山本時弘	失礼します。私は本事業を3回目で、毎年この会議に出させていただいております。毎年感じることですけど、中学校卒業した子どもたちがこの学校に来て、社会で生きる力を身につけて卒業されていくのは、中学校側としては頼りになる存在といいますか、地域でのミッションを果たしておられると感じております。また、この事業を通して、eスポーツの教育効果を含めて、立修館の発展や可能性が拡大してきているなと、実に有意義な取り組みが行われているなと思います。それから、自閉症や発達障がいの改善が必要だというので、ホースパークさんと連携した、地域の教育支援を活用した、学校課題への取り組みがスタートしたことについても、嬉しく思います。それから、昨年度よりも今年のほうが、不登校の改善率が上がってます。8割になっていますよね、昨年は72%と聞いたと思うんですが。中学校側としては、いろんな配慮をした多様な生徒を受け入れていただいて、ずいぶん対応が大変なのかなと。こういった活動を通して、子どもたちの自己存在感だとか、自己肯定感だとか、自信をもってきているんだなと。先ほど映像にあった、伊織百樺さんの眼差しはすばらしいものを感じました。 質問なんですけど、オープンスクールで御校のイキイキとした生徒と中学生との交流の機会が設けられているかどうか、もしないのであれば、そういう機会を設けていただきたいのが一つと、もう一つは、今年の進路100%ということでしたけど、御校にはいろんな専門コースがあって、もしかするとその専門を活かした職業に就く子もおると思うのですが、そういった進路先とかをご紹介いただけるのであれば教えていただきたいなと思います。
関谷豊	ありがとうございました。まず就職先・進学先一覧ですが、今日の資料には入れていないんですが、オープンキャンパスでは全員に渡しています。帰りに階段降りるときに見られてください。踊り場の所に貼っております。それとオープンキャンパスでの在校生との交流の場は、今はeスポーツ部だけやっております。eスポーツは人気なものですから、部員が行ってクラブ見学としてのふれあいはありますけど、今おっしゃったのは良いアイディアだなと思いました。実は専門学校も持っていて、専門学校では交流会流行っているんです。ぜひ立修館もやってみようと思います。ありがとうございます。
教育支援教室かんせい 藤井房雄	下関市教育委員会が設置しています、教育支援教室かんせいの藤井と申します。お世話になります。これまで多くの子どもたちが大変お世話になりましたし、今もお世話になっております。時折こちらの在校生が支援教室のほうにも顔を出してくれますし、明るい姿を見て、重ねてお礼を申し上げるところでございます。昨日オープンキャンパスの案内をいただきました。その中に、不登校は関係ありません、と色を変えて書いてありました。この一言が、私どものところにいる子どもたち、また保護者にとって、どれだけ救いの言葉になっているかということをすごく感じるところでございます。もちろん今までも、そ

	ういった子どもを十分受け入れていただいていることに本当に頭が下がる思いでございます。今不登校の子どもたちと一緒に生活している私達にとっては、これほどありがたく感じるものはございません。引き続きよろしくお願いいたします。 　先ほど親御さんのことを言われましたけど、子どもたちが私どものところに来るまたは立修館の学校のほうに行くことは家庭の安定につながっている、魅力ある学校というのは、子どもだけでなく親の安定、家庭の安定、そこにつながっていると私はすごく思います。だから、魅力ある学校に単純に子供が行っている現象だけでない、それほど大きい影響を与えていると自負されていいんじゃないかと思います。今後また教育支援教室からお世話になることがたくさんあると思いますが引き続きよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。
関谷豊	ありがとうございました。かんせいのみなさんは大活躍していただいて、不登校のエリートだと思っております。さっき（動画に）出てきた子たちもかんせいであります。 　新しい情報といたしましては、全国知事会から初めて 7 月に内閣府のほうに「高等専修学校は後期中等教育機関として、職業教育を受けた生徒を地域社会へ輩出してきただけでなく、多様な背景を持つ子どもたちを受け入れる、学びのセーフティネットとして機能してきている。こうした高等専修が果たしている役割の重要性に鑑み、高等専修学校が安定的な教育活動を行えるよう、その運営に必要な経費に対して、国の責任において補助制度の創設や特別交付税など、地方財政措置の創設など、十分な財政支援措置を講ずること」ということで政府要望が出されましたので、再来年には予算が付くだろうと聞いております。今までなかったものですから、また少し生徒のために何かできるのではないかと思っております。 　今、下関市立大学が変わってきていて、韓学長といろいろお話しする機会がありまして、発達障がいというのは、西洋的な見方をすると、生まれつきのものであると。しかし学長が言うには、小さい時からの環境要因で、親からの声掛けとかの外的要因で発達障がいと結論付けられていくんだと。これは東洋的な見方です。私は韓先生の言うことに大賛成で、発達障がいは個性だと、うちの学校では考えています。そしてこの度、市大にデータサイエンス学科ができるということで、市大と提携を結びまして、今年の 1 年生から C キューブという手法を使いまして、アンケート調査を行って、保護者と先生と生徒本人とでやりながら、その人間がどのように変わっていくかをデータ化して、科学的に分析していきます。ですから、2 年後、3 年後には、このデータをオープンにすることで、どういったことで不登校が直っていったのかを見ていこうと思っています。 　それと、今後は、3 年間の集大成として 11 月 22 日に宇部市の ANA クラウンプラザホテルで報告会を予定しております。これは委員の先生方以外にも、中学校の先生方にもご参加いただいて最終的な報告会をしたいと思っております。ですので、またお時間が許せばご出席いただきたいと思います。来年は、立修館独自で文科省にエントリーしようと思っております。これが通れば多く

	の予算が付きますので、かなり色んなことができると思っています。またご出席いただき、ご意見をいただきたいと思っております。

3　第２回　地域振興分科会　実施報告

3.1　実施概要

実施日時：令和５年１１月２２日(水)

実施場所：ANA クラウンプラザホテル宇部

3.2　参加委員

出席者	学校名・役職名
北山博士	山口県総務部学事文書課　※水野久敬の代理
今田隆之	山口県教育庁教育政策課教育企画班　※白井雅晃の代理
磯部芳規	下関市教育委員会　教育長
石﨑輝彦	宇部市教育委員会教育支援課
佐野崇幸	山陽小野田市教育委員会学校教育課幹事　※長友義彦の代理
大山隆史	山口県中学校校長会　※田中敬の代理
川畑誠治	下関市中学校校長会　会長
岸本晴快	宇部市立上宇部中学校３年主任　※森田成寿の代理
山本時弘	山陽小野田市中学校校長会　会長
藤井房雄	教育支援教室かんせい　教育相談員
関谷豊	立修館高等専修学校　理事長
関谷慶子	立修館高等専修学校　校長
山田靖浩	立修館高等専修学校　教頭
奥村翔太	立修館高等専修学校　教員

3.3　【議題１】立修館高等専修学校の現況を口頭で説明。

3.4　【議題２】３カ年（令和３年～令和５年）の活動内容をパワーポイントを用いて説明。

3.5　まとめ　一次年度の計画について

e スポーツの教育的効果について調査・研究を行いながら、発達障がいや不登校生徒の学びのセーフティネットを広げていく。

3.6　資料